

1998.11.24発行

■ パネルディスカッション ■

抜本的な改革の政党とその支持基盤を どこからどのようにつくっていくのか

パネラー

東 祥三 衆院議員・自由党副幹事長
枝野幸男 衆院議員・民主党政策調査筆頭副会長
田中 甲 衆院議員・民主党国民運動本部長代理
中村敦夫 参院議員
錦織 淳 前衆院議員・首相補佐

コメンテーター

橋爪大三郎 東京工業大学教授

司会

石津美知子 民主統一同盟事務局長

理念、政策から独自の支持基盤をつくり、
できあいの基盤に
理念、政策からの分岐をいれていく戦い

【司会】 それではただ今より、第二部パネルディスカッションを
始めさせていただきますと思います。第二部のタイトルは、「抜本
的な改革の政党とその支持基盤をどこからどのように作っていくの
か」となっております。

第一部ではさまざまな角度から問題が提起されましたが、一つは、
改革を推進するためには、その大衆的な基盤を作らなければならな
い、つまり従来の政治、経済、社会体制を支えてきた既得権益層に
立脚したまま改革を実行することはできないという問題だろうと思
います。

本日パネラーとしてご参加いただいている先生方については、新
聞、テレビなどでもいろいろお顔やお名前をご存じの方もいらっし
やると思いますけれども、共通点を上げれば、細川内閣を前後する
ここ数年の政治再編の中で政治活動を開始されてきた、いわゆる若
手と言われる方々であること、そして世襲議員ではなくて、他業種
と言ったらなんですが、他の世界から政治を志して「新規参入」を
されてきた方々、そして何らかの形で、既存の自民党的な利権政治
とは違うスタイルの政治活動、あるいは有権者との関係の作り方、
こういうことを追及し、それぞれ実践をされてこられた方というよ



うなことになるかと思
います。

さらに本日はコメン
テーターといたしましたし
て、東京工業大学の橋
爪先生にもおいでいた
だきました。橋爪先生
には、同封しました資
料にもございますよう
に、日本の社会の構造
的な変化とリーダーシ
ップの在り方、政治の
在り方といったような
ことについて、いろい
ろコメントをいただけ
ればと思っています。

己紹介を兼ねまして、それぞれの人が利権配分と手を切った政治活
動ということにどのように取り組んでおられるかということをも、ま
ずお話をいただきたいと思ひます。

東先生から、便宜上あいうえお順に並んでいただきましたけれども
も、お話をいただきたいと思ひます。よろしくお願ひします。

【東祥三】 最初にご紹介いただきました東祥三でございます。私
は九〇年の総選挙で、旧公明党から出馬いたしました。現在三回生
でございます。

り、その後は一貫して日本というのは「和をもって尊しとなす」と
いう言葉に代表される通り、何を議論し、そしてまたどこに対立点
があつて、それがどのように現象化されているのかが全くよくわか
らない、そういう中で日本の政治を志そうとする場合、本当に大変
なことなんだな、というふうに思つております。

私がちょうど衆院議員になったとき、世界的な大変革が起こった
ことは、皆さんもご承知のことだろうと思ひます。いわゆる東西冷
戦構造が崩壊してしまつた。日本の安全保障、あるいは外交の側面
は今でも全然変わつておりませんが、アメリカにおんぶにだっこし
て、そして一國平和
主義的な、あるいは
また一國繁栄主義的
なシステムがずっと
貫かれてきました。

(東西冷戦構造の崩
壊によつて) 世界戦
争の可能性というの
は、確かになくなつ
たのかもわかりませ
ん。しかし局地的に
は極めて危ない状況
になつてきている。
そういう時に日本は
安全保障政策もな
い、ちゃんとした外



前歴は国際連合の職員で、世界中の紛争地帯を回つておりました。
緒方貞子さんが高等弁務官をされている国連難民高等弁務官事務所
というところで、約七年間にわたりまして、中東、ラテンアメリカ、
そしてアフリカの地で仕事をしておりまして、外から日本の外交、
そして安全保障という問題を見ておりました。

それを踏まえた上で、日本の外交、安全保障政策を抜本的に変え
なくてはいけないということで、機会があり、公明党の議員として
(ちょうど十年前に日本に帰つてきたんですが) 九〇年の選挙で当
選させていただきました。

四年前に新進党が作られる時に、公明党の看板を捨て去つて、自
民党に代わりうる、政権をとりうる新しい政党を創ろうという意気
込みで、参加させていただきました。その新進党が、ある意味で旧
政党の垣根を超えることができず、解党のやむなきをえたんですが、
その後、稀有な政治家であります小沢一郎党首の下で——というより
自由党を結党し、そのキャップに小沢一郎党首をもつてきて、本格
的に日本の政治を抜本的に改革していこうと。

その基本は何かというと、先ほどの講演会においてもいろいろお
話がありました。究極の問題としては、日本の政治というのは、
どの政党が何を考え、何をやるうとしていられるのかということが国民
の前に明確に示されていない、別の言葉でいえば、理念、また政策
というものを国民の前にメニューとして提示していない、そこに本
質的な問題があるんだらうと思ひます。

それは多分、国民的な土壌と言つていいのかわかりませんが、日
本の長い歴史の中で、唯一奇跡的な時代がございました。それはあ
る意味で明治という時代なのかわかりませんが、その明治が終わ

交政策というものも作られていない、そこにもものすごい危機感をも
つていられるわけでございます。

エピソード的に言つた方が皆さんにおわかりやすいだらうと思ひ
んですが、九〇年に私が初当選をさせていただいた時に、多くの政
治家の方々に質問いたしました。政治というのはいったい何なのか、
公明党の議員のみならず、自民党、社会党の方々にも同じ質問をぶ
つけさせていただきました。

多くの方々には「東君、十年やってみないとわからないよ」。私は
その方々に「十年以上やっているではありませんか」と申し上げま
したが、明確な答えがいただけなかった。共通していたのは、政治
というのは妥協であるということだけをおっしゃつた。

同じ質問を小沢一郎さんに、当時自民党の大幹事長でございまし
たが、ある席でお会いした時に、同じ質問をさせていただいた。そ
の時に小沢さんは、日本の今日の多くの政治家は(九一年当時です)、
政治といえば妥協だというふうに言うだらう。しかし妥協するため
には、東君が白、僕が黒ということを明確に主張しあえないかぎり
妥協というのは成立しえないのではないか、妥協の色、つまり灰色
の濃淡がそれによつて異なってくるのではないか、初めに妥協あり
きというところに今日の日本の政治のおかしさがあるんではないか
と、約七年前でございしますが、このように言われたことが極めて強
烈な印象として残つています。

民主主義の原点の一つは、僕は、それぞれの意見をまず認め合う
ということだらうと思ひます。その意見を採用できるかどうかは別
として、まず認め合った上で、それを戦わせていける政党を作り上
げない限り、日本の二十一世紀における新しい政治というものは、

どんなことを言っていたとしても開かれてこないんではないか。

そういう意味においては、明確な理念とその理念に基づく政策をどのように主張していくのか、残念ながら自民党にも見られない。これから野党も、自分たちも含めた上でそれぞれの理念、政策を皆さん方にメニューとして提示させていただいた上で、議論できるような政党を作っていくか、とはいかない。

それはとりもなおさず、自分たちを応援して下さっている支持者、基本的には政治家になれるためには、「地盤、看板、カバン」と言い表されているように、大なり小なり何らかの形でその三つを持つていなければ、組織にならない。しかしそういうところまで、つまり自分を支えてくれている、サポートしてくれているところまでちゃんとメスを入れない限り、今申しあげました理念、政策に基づく政党政治というものはなかなか作ることができないのじゃないか。

戦後五十年たち、約十年前には国際政治の大きな大変革が、冷戦構造の崩壊ということでもたらされた。それによって導き出される一つの視点としては、自立、そしてまた自立に基づく自己責任感、これをどこまで推し進めていくことができるのかということなんだろうと思っております。

そのためには本当に個々にお話をさせていただいて、そして自分が考えていること、また自分が目指そうとする政治、それに対して理解していただける人をどれだけ作り上げていくのか、そういう問題だと思っております。

【司会】 ありがとうございます。

それでは続きまして枝野先生お願いします。

【枝野幸男】 どうも皆さん、こんにちは。ご紹介をいただきました

従来の選挙構造であれば、たとえば町内会の会長さんをおさえてその町内会をおさえていくとか、地縁血縁を頼って支持を広めていくとかというやり方が一般的だったのかもしれないけれども、それをしようもなかった。逆に私自身も、それをしないでできる選挙区を選んで、埼玉五区という選挙区から出たわけですが、結果的に現時点まで、私にとってもそういった出方をしたというのは幸いだったなあと思っております。

実はきょう、この会場にも、私の選挙や日頃の活動のためにボランティアでピラをまいていただいている方のお顔が見えます。何か地縁血縁があつて頼まれ事をするとか、例えば交通違反のみ消しとか、最初のうちは頼んでくるような人もいましたが、一切お断りし続けてきて、要するに私が政策として何を訴えているか、国会でどういった活動をしているのかということを見て、そして面白いじゃないか、ちょっと応援をしてやろうじゃないかというような形で、まさに政策、理念で応援をしていただける方に、最初のうちは大変つらかったんですが、一人ずつ集まってきたら、現在の状況に至っているわけです。

現在で五年間やっていますが、いわゆる従来型の後援会というものはございません。しかしそうはいっても、私の政治活動を支えるピラを各戸のポストに投込む活動を全部ボランティアで、選挙前の集中的な期間でなく、コンスタントに毎月何万という単位でボランティアでまいていただいたりしているというような、一種の支持基盤というものを作ってきていただいています。

そうした活動をしてきた立場から考えますと、なかなか時間がかかるなあ、というのが率直な印象であります。そしてなぜそういう

た枝野幸男でございます。

私は今、民主党で政策の仕事させていただいておりますが、私の初当選は五年前の日本新党細川ブームの選挙で、その時に日本新党で当選させていただいて、その後さきかけ、そして今民主党という政党の変遷を歩いてきております。

このプログラムにも書いてありますが、私が政治家になりましたきっかけは、そのころの日本新党が行ないました候補者の一般公募が出発点であります。この日本新党の候補者公募をきっかけにして、その後いろいろな政党が候補者の公募というものを試みてきておりますが、現時点で純粋に公募で議員をやらせていただいておりますのは、どうやら私だけのようであります。そういった経緯がありまして、まさに地盤、看板、カバンというものがまったくない状態で、私は五年前政治家にならせていただきました。

当時二十九歳、弁護士になって二年目、貯金は三百万円、立候補した選挙区は、私は栃木県の宇都宮の生まれ育ちですが、埼玉の大宮から立候補いたしました。完全な落下傘で、出馬表明の記者会見をした段階で、選挙区の中に知り合いは三人、叔父の一家が住んでいただけ。それから三ヶ月後にはもう投票日というような状況で、選挙を戦いました。

あの時の日本新党のブーム、それに中選挙区ということもあって、もしかしたら誰が候補者であったとしても同じ結果だったかもしれないという選挙で当選をさせていただいて、今二期目になっていきます。そうした意味ではまったく従来の政治家とその支持基盤とは違う歩み方をすることができましたし、せざるをえなかったという経緯をたどってきています。

た形で、新しい政治の支持基盤的なものができつつあるかというところ、裏返すと実は既存の選挙のやりかた、既存の政治的なパワーとの結びつきを極力避けてきたからこそ、時間がかかりながらも、新しい形での支持者の皆さんが増えてきていただいていると思っております。

実は二回目の選挙は民主党が結党した時で、民主党は当時の社会党の一部と合流しまして、例えば労働組合の皆さんなどからも応援をしていただけるようになりました。

この時は、労働組合の皆さんにご理解いただくのになかなかエネルギーを費やしたのでありますが、従来から中心になって私を応援してくださっている支持者の皆さんはこういう皆さんだ、労働組合の従来の選挙のパターンや組織論とは全く違った考え方でやってきていただいている方が私のコアの支持者の皆さんである。したがって民主党になったことで労働組合の皆さんに、応援していただけることとはありがたいけれども、このコアの従来の運動体の邪魔にな



らないようにやってくさいと、かなりはつきりとお願いをして活動をしました。

その後、民主党になってから選挙応援その他で、労働組合を中心とした選挙を目にいたしますと、選挙事務所のだ真ん中に労組の幹部の皆さんがお座りになって、そこで陣頭指揮をするというのが従来のパターンだったようであります。私は応援していただきながらこういう言い方は失礼なんです、労組の方に選挙事務所にはできるだけ来ないで下さいと、それぞれの組織の中で民主党の枝野へという活動を広めて下さい、そのために候補者サイドとしてできることは、言ってきただければこちらから出向いてそれはいたしまず、というパターンで、選挙事務所、選挙母体自体はまさに組織化されない政策、理念で応援していただいているボランティアの皆さんで回していただくということを徹底いたしました。

もしここで、今度労働組合はまとまって応援してくれるかなという事で甘えて、その方々に選挙を仕切っていたら、多分その前から何年かにわたって応援していただいている皆さんは、ちょっと違うんじゃないの、ということになっていたのではないのかなという思いをしています。

なぜこういった選挙をやらなくてはいけないかということは、政策、理念と結びついているんだと、私自身では納得しているつもりです。

先ほど来、自立という話がでていますが、私自身は今の日本の政治で必要なことは組織によって上からものを決めていくやり方から、個人ができるだけ自立して動いていく、その中で自己責任でものをまわしていくような流れに変えていかなくてはならないだろう

んでいく時期があったわけですよ。

市議会に当選した後、三年後の県会議員の補欠選挙に立候補をしたいと思われました。市議会ではどうしてもとどかない問題というのがありましたから、県政に参画をしたいという思いで、その間に私が行なったことは、市議会の中の会派には入らずに一人会派で、そして議会が終わりますと、議会報告と称して、自分の車に看板とラッパ―拡声器を積んで、どこでも人が通るところに立ってはその日の議会の内容を報告して、町中を演説といいますが、少々で話をしていたわけでありました。

紹介の中で二千回を突破したと書いてありますが、その当時は二千回ではきかないほど、数多くの街頭演説を行なっていました。

県会議員に補欠選挙で当選してから、本選挙で地方議会三回の選挙を行ないました。いずれも祖父の地盤を耕すということで、もうこてこての自民党の選挙でありました。今から考えると、よくもまあこんな選挙をやったもんだと、あるいはよく我慢したもんだと思えます。議会活動の中では一人会派で頑張ってきたつもりでありましたけれども、選挙自体は大変に古い選挙を行なっていたというのが事実であります。そういう面では、枝野さんと私はずいぶん違うんですけれども、枝野先生のようなスタートを切れたということは、政治家としては本当に幸せなことなんだなというふうに思います。

私の場合は、そのような形をどこで変えるかということですが、でも、一九九三年のあの細川政権ができる前の選挙の際に、当時私は自由民主党の千葉県の青年局長を務めさせていただきまして、街頭遊説活動のリーダーとして全県を回っておりました。どの地域に

うと思っっています。組織で上からものを決めて強制していくというところから、一人ひとりの自己責任、自立でものを動かしていくという理念、政策を進めていこうという時に、その人間を支える選挙基盤、政治基盤が上からものを決めていって、組織で動かしていくというやり方をするということは自己矛盾になっていく。自立した個人の成熟した社会を作る以上は、自分を支えていただく政治基盤、選挙基盤も自立した個人の皆さんによる、上からのトップダウンではなくて、横の緩やかなネットワークでものを進めていくということをやっつけていかなければ、支持基盤と政策との矛盾が必ず生じてくると思っています。

実は五年もやってきて、今さら元の弁護士になかなか戻りにくいなあと考えると、だんだん選挙に落ちたくないなあと恐くなってくるんですが、歯をくいしばってこういうパターンで続けていければと思っっています。

【司会】ありがとうございます。それでは田中先生、よろしくお願います。

【田中甲】田中甲と申します。きょうこの会場に呼んでいただいたことを、本当に光栄に思っています。

私はちょうど三十歳の時から議員活動を始めました。当時は千葉県市川市の市議会議員でありましたけれど、一九八七年初当選であります。

そもそも私の家は、祖父が昭和二十二年から県議員を務めておりました、私は昭和三十二年生まれですけども、家にはいろいろな陳情で、あるいは相談事で訪れる方々がいて、私も知らず知らず、こういうことが政治家の活動なのだろうということが、肌染みこ

行つて話をして、自由民主党という政党の話には耳を傾けてくれない、そういう時代でありました。あなたは何党ですかと聞かれた時に、自由民主党の青年局長ですとお話すると、あっそう残念ね、と皆さん方が立ち去られてしまふ。

そういう経験をずいぶん多くする中で、今期待されている政治家の動きはどういうことなんだろうか、また自民党の中からは政治を変えていくことができないという思いを持つ中で、私は自由民主党を離党いたしました。そして無所属で衆議院選挙に挑戦する準備を進めていたんですが、ちょうど時あたかもさきがけが誕生した時であります。東京都議会選挙の結果を見ても、有権者の方は政党名ということが大きな判断の基準になっていることを感じ、だめでもともとと思いつながら、武村代表のところを訪ねていたのであります。

ちょうど、錦織さんが武村さんとお会いした時期といつしよとのことですが、さきがけで衆議院選挙に当選させていただきました。まだその時、私の選挙は古いタイプの選挙でありましたが、その後衆議院議員の活動をさせていただく中で、後援会の解散ということを行ないました。次第に巨大化し、肥大化していく後援会は、業界団体と同様に利益誘導ということを求めてくる団体になってしまいます。そして外の皆さん方が非常に入りづらくなっている、逆に市民サイドとの接点が削がれてしまふ、輪が広がらないということ等がございまして、最終的には金銭のやりとりで大きな問題があったことも事実でありますけれども、後援会を解散しました。多くの皆さん方にはお手紙でその内容をお知らせして、未だにご支持はいただいておりますけれども、後援会組織の活動は一切ありません。



せん。

その後迎えた九六年の選挙ではボランテア選挙で、業界、団体、労働組合、宗教法人等一切の団体からの推薦を丁寧に断りさせていただきました。団体ではなく個人として応援してください、一市民として応援していただきたいです。その時は、私はもう落選することも覚悟の上の選挙でありましたが、結果的に自由民主党が業界団体を取りまとめていく選挙と、非常にコントラストが明確になった中で私の選挙が行なわれたものですから、前回の選挙も当選させていただくことができました。

推薦状を二百枚も三百枚ももらって壁に張りつける、そういう選挙というものはまさに、業界団体にこれだけしらみをもつています、ここに首をつながれたといえますか、足かせをかせられたということも露呈しているようなもので、そんなことを続けているよう

企業の倒産事件、あるいはM&Aをめぐる熾烈な企業の争奪戦、そういうのもやりました。また普通の市民が普通の生活をしていく上で時々ぶつかっていくようなごくごく外見はありふれた、しかし本人にとっては深刻な事件、そういうものもありましたし、ほとんど弁護士として経験をしなかったものはないというぐらいのことはやりました。

政治に転身した理由はいくつかありますけれども、ひとつは、いろいろと世の中を眺めていまして、時代が文明的な転換点に来ていると長らく考え続けておりまして、その文明的な転換点はいったい何なのかということを解明するために、何度も何度も中東諸国を訪ねました。そういう中でやはり政治というものとなんらかの形で向き合いたい、そう考えるようになったのが最大の理由であります。

また私の場合は、生まれ育った島根県という田舎に選挙区を選びまして、一回目の選挙は、前々回の衆議院選挙で新党さきがけの公認として出馬をいたしました。この時はかろうじて中選挙区で第五位で当選をしたということがあります。

前回は、小選挙区になって選挙区が三つに分かれ、私の場合はどこでも出ようと思えば出られたわけでありませうけれども、あえて島根二区という最も楽しい選挙区を選んだわけがあります。

それは竹下登先生という今日もお日本の政界、あるいは社会のドンとして君臨しておられる、その方に一騎打ちを挑むという、政治家にとっては枝野さんよりもっと幸せな選択肢を選ぶことができ、このようならばらしいチャンスを与えてくれた天の定めに対して、ここから逃げることはできないと、気取って言えば、そういう

な選挙は本当にやめなければいけない。実際にそういうことをやめて当選できるのかどうか。私の小さな小さな一つのケースでありませうけれども、そんな姿が、多くのこれから政治家になりたいと思う若い皆さん方に参考になれば、大変にありがたいと思っています。

現在もう一つ私は課題を課しまして、政治家が行なうパーティやその他の集会ということは一切やらない、勉強会、政策研究会等はもちろん別でありますけれども。パーティについてはさきがけ当初からも、あるいは民主党になってからもやらないという約束の下で、確か公約をあげてきたはずであります。私はそう記憶しておりますけれども、実際にそれを守っている議員は少ない。やはりそういうことをちゃんとやめていかなければいけないだろうと思っております。

二度目の当選後は、議員立法を自分の課題として進めているところでありませうけれども、それはまた後ほど発言の機会をいただきたい時に、お話をさせていただければと思います。

政治とは命を守ることだと思っております。自己紹介に代えさせていただきます。

【司会】 ありがとうございます。それでは錦織先生、よろしくお願いたします。

【錦織淳】 ご紹介をいただきました錦織淳でございます。自己紹介ということでございますので、簡単に経歴をお話いたします。

私は二十六歳の時に東京で弁護士登録をし、ちょうど二十一年目に政治の世界への転身を決意いたしました。弁護士時代は、ご存じの水俣病の事件とか元台湾軍人・軍属の戦傷補償請求とか、そういういわゆる社会的な事件もたくさんやりましたが、同時にまた上場

ことでその選挙区を選んだわけがあります。

私の場合は一貫して一つの政治スタイルとして、これまでの積み上げ型の政治ではない、私にとつての歴史認識、文明的な価値判断、そういうことを最初の選挙から正面に掲げて戦いました。もちろん有権者の方が、その言葉を額面通りに受け取って入れてくれたかどうかということはまた別問題ですけれども、私自身はそのような認識でもって戦いました。

最初の中選挙区の出る時、実は何度か誘いがございまして、自民党のある長老議員の後援会の跡継ぎになってほしいとか、あるいは連合島根という、これは股さきになる前はかなり良き時代で、連合参議院が何名も誕生した時期がございましたが、そのころにもすでにお誘いを受けておったわけでありませうけれども、私はまず政治家の出発点として、そういう既存の後援会、あるいは既存の労働組合、そういうものの組織の支持を頂戴して出るということが政治家としての行動、発言を制約することにな



るということを考えまして、あえてそうしたことをご辞退申し上げました。最終的に私が前々回の衆議院選挙に出る時には、私一人で田舎に帰って出馬を表明して、たった一人から戦いを始めたということでございます。

ただ小選挙区の戦いの中で、非常に先方が強大な組織をお持ちでありまして、前回もいいところまでいったわけですが、中山間地帯に三つの郡がございます。十カ町村でございますけれども、そこで一万五千票の差がついて、あとのところはだいたい、いいところまでいったんですけれども、郡部で竹下さんの方に大量に貯金をされて敗れたわけでありまして。

その地域に、最近私の支援グループが誕生いたしました。ところが先般聞きますと、そのグループに対して、例えば会社に朝から電話がなりつばなしとか、あるいはお前の所の企業は倒産するぞうだというような噂を流されたり、あるいは一部土建業者の方々もそのグループに入っているわけですが、その業者には砂を売らないというようなことを業界が決議しようとして、良識ある支部長がそれをとめたというようなことも行なわれておりまして、文字通り私を応援することが会社がつぶれるかどうか、家族崩壊の危機にもなりかねないという状況です。このあいだこの幹部たちが笑って言っておりましたが、次に錦織が負けたら自分たちは中国に逃げるしかない。ここまで言っておいたので、私も大変責任を感じておりますけれども、それだけ本当に血みどろの戦いをしなければいけないというのが、田舎の政治の現実であります。

私自身としては、そういうことを一つ一つクリアしていくために、いったいどのような政治スタイルを取るべきなのかということを悩まずに先般私はさきがけを離党表明し、それと共に手塩にかけた政党支部の解散届けを提出いたしました。その瞬間、私の手元には組織というものがなくなってしまうのであります。

そこであらためて、個人後援会をもう一度立ち上げることにいたしました。八月の末に地元で集会をやりまして、確かに一千人を超える大勢の人が集まって下さいました。これも私にとつての大きな励みでありましたけれども、しかし政治家として考えてみると、後援会を事実上解散させて自ら政党の支部をつくる、そのように選んだ道が結局は政党支部を解散し、また元の木阿弥の個人後援会に戻るといことは、外見的にいいですと大きな後退であります。

そうしたことを一つ一つ体験をしながら、言葉と同時に日本の社会で新しい政治というものに実態を与えていくことがいかに困難なのかということ、特に私のような保守風土の強いところでは、そうしたことについて、本当に日常生活のしがらみと一歩一歩正面から向き合いながら戦っていかなければならない。そういうところでは大変苦勞するということもまたご理解をいただきたいと思います。

みなながら、組織作りに励んでいるということでもあります。

後ほどまたお話をするチャンスがあるかと思いますが、私の場合は絶えず言葉と行動を限りなく近づけることが必要ではないかという信念を持ってまいりましたし、今の日本の政治で政治家、政党がなぜ信頼されないのかといえれば、それはやはり言葉の問題ではない。もちろん言葉も語れない政治家もいるやに聞いておりますけれども、それは論外といたしまして、問題は今誰でもが改革を語る時代にあつて、改革の中身が問題だということもひとつございますが、しかし私はもともと初歩的な基礎的なこと、つまりそれは言葉で言った通りに行動できるのか、そしてその言葉の通りに戦つて見せることができるのかどうかということが非常に大切だと思うようになりました。

そういう意味で、私なりに言葉通りに行動を続けてきたつもりであります。例えば平成五年の秋に政治改革政権が誕生し、そして政治改革こそ日本の社会を変える突破口だと、こういうふうに言われた時、私なりにそれを受け止めて実際にどうしたかといえますと、自分の、わずかな期間ではありますが、作り上げました個人後援会を開店休業させました。そして、新党さきがけ島根県支部というものを結成したわけでありまして。そして翌年の六月には、田中甲さんの憶えておられると思いますが、来ていただきました。県庁所在地の松江市に三千人の人が集まったわけでありまして。

あの保守風土といわれる島根県に保守新党の誕生、そして政党の支部を掲げた集會に三千人の人が集まるということは、極めて驚異的なことであつたわけでありまして、しかし残念ながらわが党そのものの風化、そして私自身の努力の足りなさということもあつて、

● コメント ●

国民は政治家の職責を尊敬すべし

【司会】 どうもありがとうございます。

お話を伺つてお気づきになるかと思いますが、それぞれの方が改革という自らの主張にふさわしい実際の支持基盤をどう作るか、あるいはそれに反するような古い支持基盤をどういうふうに入れ替えていくのかということ、大変御苦勞されながら活動されてきたと思います。

第一部の講演にもありましたように、そういった五十五年体制を支えてきたのは単に永田町の先生方だけではなくて、実は私たち一人ひとりを含んだ国民でもあつたということでありました。この基盤が変わらないことには、やはりこういう試みというのは埋没をしていくしかないわけです。

そういう意味で、今のお話にもあるように政治を根本から変える、理念、政策で政治家を選んでいく、そしてそういう政治家を育てていく国民の義務というものもあるかと思ひます。その辺を含めながら、つまり今のお話を有権者のほうはどう聞くべきかというようなことも含めまして、橋爪先生からコメントを一言お願いしたいと思います。

【橋爪大三郎】 橋爪でございます。四人のいわゆる若手の改革派の政治家のお話を伺つておまして、日本の未来も捨てたものではないなというふうには私は感じることができまして、ちょっと嬉しく

思っております。

ただ残念なことに日本の政治風土というものを考えてみますと、あまり政治に価値を置かないという伝統があったと思います。とうよりも、むしろ、政治とか法律とかということをとかく軽蔑し、敬遠して、自分とは関係ないことと考えたがるということが、どこか日本人の中にもまだあるのではないかと思います。

これには長い歴史がありまして、政治発言の機会も言論の自由も一千年以上にわたってないのも同然であったと、こういう時代が続きますと、何かそういうのに巻き込まれる時は、たいい税金が上がるとか、ろくなことがないので関係を持たないようにしようと、こういうふうになっているんです。

これがあるものですから、とかく政治家というものはお金に汚なかつたり、古くさかつたり、悪いことをする人たちであると。また同時に政治家に対する軽蔑というのかなり広くいきわたっておりまして、有権者にすれば政治家の悪口を言い、軽蔑しさえすればよいと。そうすると何か政治が良くなるかのような錯覚を持っているんですが、これは大きな勘違いであると私は思っています。

むしろ今必要なことは、政治家の職責に対する尊敬の念を私たちがしっかりと抱いて一人一人に対する尊敬ではないですよ、政治家が行なう職責、仕事に対する尊敬の念ですけれども、その基準に照して厳しく政治家を選び、政治家を育てていくという積極的な態度ではないかというふうに思います。

次に政治家の皆さんというのは、こちらに並んでお話をしているも、大変にカッコがいいわけですけども、それはなぜかと申しますと、落選するからだと思えます。落選するかもしれないから政治

なしに政治というのではないのです。

では政治というのは何か。政治家を前にして私が何か言うことはないんですが、私が考えるのに、皆を拘束するようなことを決めること、これが政治だと思います。皆を拘束してしまうようなこと、例えば税金をいくらにするとか、戦争をするかしないかとか、どこに橋を作るかとか、学校の制度をどうするか、そういうことを決める、これが政治だと思います。

古手の政治家の方に質問して、それは妥協だよ君というふうに皆さんお答えになったそうですが、妥協というのは確かに技術としてそうなんですけれども、しかし妥協するのが政治だというのは信念がある人がおっしゃることで、信念もないのにただ数を集めればいいと妥協しているのでは、政治にはならないわけです。自分のやりたいことがあって、それを公的な場で、国会の場で決定していく、これを追求するのが政治だと思います。

民主主義の原則は多数者が決定する権限を持つわけですから、政治をやるうと思えばどうしても多数者、マジヨリテイというものを獲得しなければならぬ。ではどうやってマジヨリテイを獲得するか。それには「私を選んでくれればこういうことをします」、あるいは「こういうことをやりたいので、皆さん一緒にやりましょう」と議員の方々が協力する、こうやってマジヨリテイを作るわけですね。マジヨリテイの作り方として、そのプロセスで妥協というのが手法として必要になってくる、こういう順番ではないかと思えます。

ですから政治が妥協だというのは正しいんですけども、それは現象論で、永田町にそれしかないと思えば、結局何が悪いかというところ、有権者が国会で自分の意志が反映されているかどうかというこ

家なんでありまして、落選しちゃいけないので、なんとか国民の皆さんの支持を得ようと必死で頑張られる。この緊張感が、戦っておられるという姿勢に結びついているんだと思います。

なぜこういうことを言うかと申しますと、例えば大学の人々など見ておきますと、落選とか首になるなんてことはないわけですね、緊張感がまるで違う。そういう仕事は多いと思うんですけども、政治家というのは落選するという稀有な仕事でありまして、企業もそうで、倒産するということがあるから市場経済が素晴らしい。政治家も落選するからこそシステムが回っていくわけでありまして。皆さんは当選してくださるように、私は個人的に応援したいという気持ちで一杯ありますが、しかし理屈からいえば、落選ということ



とを厳しく監視していない、そこで議員の側に惰性が生まれてしまっている、こう思います。

四番目でですけども、皆さんの選挙運動についてご紹介がありました。選挙でマジヨリテイを形成していくその手続と、政治を通じて実現していきたい社会のイメージが重なっていると。個人個人の自立した選択によって票をいただく、それが多数になる、この構造が選挙区にあるわけですが、同じように国民全体として、国家全体としてなるべく多くの人々に支持を得られる、多くの人々を幸せにできるような選択を形成していったよりよい国をつくらう、これはアイソモロフィック (isomorphic)、同じ形なんです。こういう形を追求していらつしゃるといことが、私は政治の新鮮さですばらしいなと思います。

これはおそらく小選挙区制に変わって、新しく生まれた状況だろうと思えます。皆さん、組織の推薦とか利害団体とか手を切った手作りの選挙をなさう、有権者を信頼してやろうとおっしゃる、これは大変立派なことだし、正しいことだろうと思えます。

ただ別な面で非常に意地悪に言いますと、従来型の選挙ではもう当選できないんです。例えば労組の支持を得たとすると、ボランティアの人たち、無党派層が離れてしまつてマジヨリテイにならない、それから宗教団体とか旧い自民党とかいうことでは、大多数の人たちが離れてしまつて過半数に達しない。だからおそらく自民党の人たちとか、全然改革なんてことを考えていない人たちも頭はいいですから、政党を隠したり、改革をするようなポーズをしたりして、同じ選挙手法でやってくるということがあるでしょうから、前回はどうまくいったかもしれませんが、今後はちよつと気を付けて、さら

に改革の内容で差別化していかなくてはいけないのではないかと考えます。

政党文明を日本社会に確立するために、 政治家・政党と有権者のあり方を問う

【司会】 ありがとうございます。大変鋭い指摘で、ここに並んでいらっしゃる政治家の皆さんに頑張ってもらいたいというのは簡単なんですが、では有権者自身が政治というものをどう見るか。さきほど錦織先生から政党支部のお話もありましたけれども、政党をやる活動、政党の支部の構成員になる活動はなかなか日本では国民の中に定着していないですね。政治家の個人後援会に入るといってころまではきて、政党の支部を作る活動までなかなか踏み込める有権者はいない。こういうことを含めまして、政治家の職責に対する尊敬の念をわれわれが持つ、そこから現実の政治家を厳しく見るということが必要だと思います。

橋爪先生の最後のお話にもございましたが、前回の選挙は、自民党型選挙とは違うという、差別化でかなりいけた面もあるわけですが、次の選挙というはおそらく政権を任せるに足る政党のブロック、あるいはその指導者の顔は何なのかということを通って争われてくることになるかと思えます。

そこへ向かう前段といたしまして、政策の中身、例えば今回の金融の問題にしましても、さきほど平野先生がおっしゃいましたように、そして日本の政党は「歌を忘れたカナリア」である、綱領を語れぬ政党、政策を語れぬ政治家という語呂合せで、前段の方に私の言いたいことがあつたわけですが、しかし最近少し考え方が変わるようになってきました。

実はさきほどちょっとご紹介いたしました、私の地元で、さきほどの後援会の、改めての立ち上げ式をやったとき、私はこういう風に言いました。われわれは自民党政治を批判してきた、しかしよく考えてみると、そのつばは実は天にむかつてはいているにすぎない、もう一度自分の頭に落ちてくる、これが日本の政治の現状ではなからうか、私は最近そのように思うようになってきました。

つまり私は、私自身が政治家という人生の選択肢を判断した時、以前からずっと考え続けてきた文明的な転換にどう対応するか、こういうことこそ政治のあるいは政党のもっとも重要な課題だと、こういう風に思い、かたくなにそれを信じ、言い続けてきましたが、最近そういうことを言うことを何か極めて空しく感じるようになってきました。

そこへ到達するずっとずっと手前にわれわれはいるんだということを思い知らされたというか、そういうふうではないと、日本の政治の現状を楽観的に分析して思い込みたかつたのか。しかしそういう思い込みに疲れてしまった時に、やはり残念ながらもそのも政党、あるいは政治そのものが持っている初歩的な機能そのものが衰弱していると、むしろ考えるべきではないか。つまり私が考えてきた以上に深刻な危機が、日本の政党政治を蝕んでいる、むしろそれが現状ではないかと思えます。

私にとっては二十一世紀の国家ビジョン、社会のあり方、イメー

に、内容については多々まだ問題点は残っていますけれども、明らかに政策決定のプロセスが変わった、これは参院選挙の結果です。自己責任原則ということベースにしてやっていくのか、それとも護送船団方式を延命をさせるのか、こうした理念、哲学的な違いというものをかなりはっきりした上で、これをどちらの原則で、誰が主導権をとって決着をしていくのか、かなりはっきりしてきたのではないかと思えます。

そういうことを含めまして、自立、あるいは自己責任ということベースにした時の政策論議のあり方、あるいは自分が得意にしていく政策分野の提起の仕方、国民に対して、あるいは政治家同士の論議で、何がどう変わっているのか、あるいは何をどう変えていきたいと思っているのか。あるいは議員立法についても、従来の官僚主導型の手続きからどのように変えていくことによつてここがどう変わった、あるいはこう変えようとしているというようなことを少しお話をいたしたいと思えます。

【錦織淳】 ちょっと質問の後ろの方を聞きそびれてしまいましたが、私は政治改革というものを総括しなくてはいけないということで、田中秀征さんとの対談の本を出しました。その時に一貫した私のモチーフといえますか、考えの基調にあったのは、政党というのは国家観を持たなくてはいけない、あるいは世界観といつてもいいのかもしれない。それが、そういう意味で政党の本質は綱領である。ですから綱領をめぐる政党と政党の競い合いという時代を早く到来させなくてはならない。それにもかかわらず、日本の政党政治はまったく綱領を持ちえない、せいぜい改革一般を唱えるのみという現状に対するいらだち、不満、怒りというものから私なりにいろいろ発言してきました。

ジについて考える時に、暴走する資本の論理、市場の大競争時代の到来といったものがあるようなことをもたらすか。地球の砂漠化、人間の心の砂漠化、そういうものをもたらすのではないかと危機感から、新しい社会を作り上げていくことが政党の大きな役割だと考えていたわけですが、実は日本の政治はもっとも手前側で戦つていかななくてはならないということです。

私は田中秀征さんの後を継いで、さきだけ塾長を引き受けました。先日最後の塾をいたしました時に、立教大学の齋藤精一郎先生をお招きして、非常に分かりやすいお話をいただきました。前門の虎、後門の狼という話で、つまり経済政策をめぐってというなら、前門の虎というのは今私が申し上げた暴走し、荒れ狂う、牙を剥く市場経済、こうしたものに対してどのように戦っていくのか、これが前門の虎。後門の狼というのは言わずと知れた不良債権。本来ならばわれわれは、もうとつと前に前門の虎に向かつて戦つていかなければならないのに、実はもっとも手前側で後門の狼におしりを咬まれたり、足を咬まれたりしてヒーヒー悲鳴をあげて、とても前門の虎に対峙するどころではないというのが日本の政治の現状だということ指摘でした。

経済の問題に關していえばそういうことであり、経済以外のあらゆる分野においても、残念ながら日本の政治の機能が非常に脆弱になっている。なぜこんなふうになってしまったのかといえば、言わずと知れた高度成長をもとに官僚組織が発達し、民間企業を含めて日本の社会が一つの経済的な繁栄をとげ、その中で政治的機能というものが利益分配、いかにパイを分け合うかということにどんどん特化してしまつた。矮小化してしまつた。その間に政治というも

の力そのものが、本当に老衰死寸前までおちこんでいる。やはりこれは、私は自民党政治の責任というよりも、日本の政党政治全体の危機なんだというふうに考えざるをえないと思っています。

【司会】 田中先生お願いします。

【田中甲】 先程の私の発言の続きにもなりますけれども、二回目の当選をさせていただいてから、自分がどういう課題をもって政治活動したかということからお話しさせていただきたいと思っています。

国権の最高機関であり、唯一の立法機関という立法府の中で、官僚が提出してくる法案、いわゆる内閣提出法案ではない議員立法というものを、市民からの要望や意見を聞いてどれだけ作っていくことができるか、そしてその議員としての感性が、本当に世論背景を持った政策である、必要な議員立法なんだということを判断できるかどうかということが、本来の議員活動の中心のところにしなければいけないんだと思います。

政治家というのは党務、政務、選挙活動、この三本の柱ができて一人前の政治家になるということを経済時代にずいぶんたたきこまれたんですが、そうではない。市民との交流をもって、NPOやNGOの要望を聞いて、法案を作り上げ、議員立法で提出していく議員活動がイコール選挙活動につながっていく活動をしなくてはいけないんだという、私なりの目標を立てて、二回目の当選後の活動をしています。

最初具体的に言ったことは、秘書を変えました。今までは国会対策といいますが、陳情処理のできる秘書が一人いればという、自分からそれを強く望んだわけではないのですが、入ってくる秘書さんがそういう秘書でした。私が目をつけたのは、内閣法制局の経

験のある秘書を欲しい、せっかく皆さん方のご理解で、政策秘書という枠組みを作ってくれたんですから、内閣法制局で実際に立法作業にかかわってきた—私はそこに少し問題があると思っていますけれども、憲法の解釈というのは内閣法制局が行ない、そして閣法その他の立法機能というのは内閣法制局にあるという大きな錯覚、また現実の中でもそのような位置付けになってしまっているわけですが—この内閣法制局のスタッフで、立法府が本来の立法を作る場所なんだということを考えてくれる人間はいないのかと、ずいぶん前から声をかけた中で、一人その思いを持って私の事務所に入ってきてくれた男がいます。

その人間と一緒に、私の場合は衆議院ですから、衆議院法制局と話し合いをしながら法案をつくっていくという活動を行なっています。

私はまだまだ勉強の段階でして、なにもかもが勉強という思いの中から、とにかくかけずりまわって、何か自分で会得できるものがあるだろう、そして次の世代に何かを伝えてあげられるはずだということ、最初に行なったのが県議会時代から、治安の強化、警察の信頼される姿をつくるということが一つのテーマでしたから、風営法の改正ということを目指しました。

そこでお笑いになるかもしれませんが、ダンススポーツ推進議員連盟というものをつくりました。なぜダンスなんだとお考えになる方がいらっしゃるかもしれませんが、ダンススクールというのは風俗営業だったんですね。この法改正を目指しました。どの選挙区でも、どの政党の議員さんも、ダンス大会と呼ばれてダンスとの接点を持っている。今ダンスの愛好者が一千万人ともいわれてい

るんですけども、この世論背景のあるところから糸口を捜して、法改正につなげられないだろうかということ、ダンススポーツ推進議員連盟、そういうものを作りまして、議連で超党派で法案を提出し、本国会で法改正が実際にできました。

法を改正するということは本当に難しいもので、一つの改正をするとその後に、それによって被害を被るといいますか、今までの既得権益を失っていく団体がありますから、いまだにその継続した作業というのは進んでいますが、自分で体験した一例であります。

野党が法改正というものを持ちだして、実際にできた例というのは少ない。つまり今までは野党は議員立法というものを出すと、提出をしましたというところで終わってしまう。野党ですから成立しない、つまり議員立法を出したというひとりよがりです。議員連盟での超党派の活動ということをやってみなければなりません。

金大中大統領が訪日されましたが、私は恒久平和のための真相究明法の成立をめざす議員連盟というものも、立ち上げさせていたいただきました。これは機会がありましたらお話をさせていただきたいと思いますが、真相究明をして次の世代に事実を伝えることで、恒久平和という憲法の前文に沿った日本の姿を作りだしていくことができるという考えで、この議連の中で、具体的には国立国会図書館法の一部改正を行ないまして、戦前、戦中、戦後の公開されていない資料を情報公開すると、一言でいうとそういう法案であります。そのため議連を今立ち上げたところであります。

それと若い方も今日は多いんですけども、日本の場合には二十才が成人年令で、そこで選挙権が与えられるんですが、被選挙権と

いうのは地方議会においても二十五歳です。これを成人年令と選挙権と被選挙権は同じ年令にすべきだ、高齢化社会が進んできて、若い方が担っていく責任というのは増えるわけですから、議会に対して発言する権利というものを成人年令とともに与えるべきだということ、これもやはり超党派の議連をつくって提出できるようにしたいと思っています。

市民団体、NPOやNGO、こういう方々の声を聞ける活動、そしてそれが先ほども申し上げましたが、選挙の活動と直結していく。そういう意味では小選挙区というのは非常にやりづらくて、全国的な世論背景を持つ法案を議員立法として提出していく際に、小選挙区に帰っていくと選挙では難しい点があるのかもしれない。

【司会】 それでは枝野先生お願いします。

【枝野幸男】 私は今の政治の状況を考えた時、政党に対する考え方は、錦織さんと少し違うのかなと思っています。私は今の段階での政党にあまり大きな期待をかけるべきではないと思うし、政党は道具であるという割り切りをせざるをえない状況ではないかなあと

いうことで、政治の構造を今考えています。というのは二つ理由があります。まず一つは、政党に対する修練度というものが日本にはありません。先ほどの橋爪先生のお話などにもありました通り、市民が政治から距離をおいている、あるいは距離をおかされてきた歴史の中で、政党というものをしっかりとさせようと思った時に、少なくとも相当長い過渡的な期間、政党の組織人というものが国民の中の非常に一部の人たちになってしまうという必然性を抱えています。

イギリス、アメリカの政党は、裾野が広がっています。共和党や

民主党はそこがだんだん減ってきていると言われていますが、いずれにしても西欧諸国に比べれば圧倒的に日本では、政党の党員の数というのは今の自民党にしても少ない。日本社会党がなぜ失敗したのかを考えた時、さまざまな理由がありますが最大の理由は、ごく一部の党員によって意志決定がなされ、日本社会党に投票してきた圧倒的多数の意向とは違った方向に党の政策が決められてきた。これが日本社会党が国民から離れた政党になってしまった、最大の本質的な原因だろうと私は見えています。

今政党というものの、特に政党の組織というものを強くした時に何が起こるか。今の段階で政党に、例えば民主党に入党していただいている方の数、そしてその人たちの層というのはどういう人たちになるのかということ考えた時に、地域によっての事情はあるでしょうし、市民的な視点から入っていただける方もある程度は確保できるかもしれませんが、そこで多数決をとった場合には、おそらく大きく左にぶれるとか、あるいは大きく労働組合依存にぶれるとか、つまり民主党に本来期待しているような層の人たちのコンセンサスは違った方向に党内の民主主義の結果はなってしまうおそれがある、すごく大きいと思っています。

これは民主党に限った問題ではない。日本の政党の裾野、つまり国民誰もが、有権者誰もが、全員といわなくてもいいですけども、日本人の六割、七割、八割くらいの人々がどこかの政党の党員になって、その党の意志決定に影響力を持つというような裾野を持った時に初めて、草の根組織を足場にした政党が政治をリードしていくような状況になるのではないかなあと思っています。そここのころの基盤がまだまだ日本ではできていないというのが、今政党を軸に物

での二つの流れとは何なのかということ、まだまだ見えていないと思っています。

歴史認識という話は先ほども平野先生の話などでもしてきましたけれども、私はこういう視点から歴史をとらえ、政治もとらえるべきだと思っています。

私たちはどうやら、想像もできないくらい大きな歴史的な変革期にいる。日本史をふりかえってみると、明治維新に比較をされたら、あるいは戦国時代に匹敵するような大きな変革期にいるんだと思っただけがいいと思います。その時に動いていた人間——政治家であれ、市民であれ——が、どんなことを思っていたのかということをしつかり考えながら、物事を進めていくべきではないかと思っています。

例えばわが党の昔代表を織田信長に例えたりする人がいると思いますが、織田信長がやろうとしていたこと、そして戦国時代という変革期の結果生じたもの、それを比べてみると、織田信長がやろうとしていた変革と織田信長が活躍した結果で上がった徳川幕藩体制というものは、実は全然違ったものだった。

それから明治維新を考えてみた時に、誰のことをとらえたらいいかわかりませんが、例えば吉田松蔭とか久坂玄瑞とかという明治維新を動き出させる出発点のところ、大きな役割をはたした人たちが目指していた変革の姿と、で上がった明治維新体制とは実はまったく違っていったものであったという、歴史の変革期における、変革の役割を担った人たちと変革の結果とのずれというもの、冷静に見ておいたほうがいいのではないかと私は思っています。

しかし織田信長にしろ、吉田松蔭や久坂玄瑞にしろ、それぞれ

事を考えるのが非常に難しい理由です。

もう一点、今の日本の政党はまだまだ政界再編の大きな過渡期にあると思っています。

あまり民主党の一員として大きな声で言い過ぎてはいけなし、誤解を与えてはいけません。私は民主党は将来、あるべき二大政党制の姿になった時の片方の翼になる可能性を秘めている政党だとは思っていますけれども、必ずそうなるかどうかについては、まだまだこれからの政界再編の大きな動きの中でわかりません。政治家一人ひとりの意志にかかわらず、歴史の流れとしてまだまだ離合集散がありうる状況の中で、きちんとした裾野のしっかりした政党を、今の段階でどこまで作っていけるのかということに対しては、かなり疑問があります。

そしてそもその前提として、例えば二大政党といった時、何らかの明確な哲学、理念で二つに分かれるなり三つに分かれるということがなければいけないわけですけども、私はまだまだそれが、私たち政治家自身もあるいは日本人全体にも、見えていないんじゃないかなというふうに思っています。

組織依存型社会、お上依存型社会から個人自立型社会への転換というの、歴史の前と後を分ける大きな分水嶺だとは思いますが、それは歴史の前と後を分ける分水嶺であって、個人自立型の社会を作ったところで、その個人自立型社会に二つの大きな流れというものがあつた、これが二大政党になっていくというようなものではないでしょうか。

歴史の古い部分と新しい部分のしがらみをけずる時期は過渡期だけであるというふうに思います。そうした意味では、自立型社会の中

の時点、時点ですべてだと思つて一生懸命やったからこそ、歴史は大きく動いたんであつて、結果とのずれについていい悪いという話ではないんです。今は、私は歴史的変革期のまだ入口だと思つていますが、われわれがゴールまでしっかりとみずえないと変革ができないのかということを考えた時に、ゴールを明確に分析して、こういうゴールが見えるんだからこう動こうということであつたとすれば、織田信長や吉田松蔭のような動きはできないだろう。今現在正しいと思うところでまずは走つて、変革の流れを大きくしていく以外に、今の時代にできることはないんじゃないかなあと思つていきます。

話がいろいろ飛ぶんですが、司馬遼太郎の『花神』という小説には、歴史の変革期には三人の役割を持った人たちが順番に出てくる。まずは思想家が出てくる、そしてその思想を受けて革命家が出てきて、最後にテクノクラート、技術者が出てくる。明治維新の時思想家としての吉田松蔭、革命家としての高杉晋作、そして『花神』という小説では日本陸軍を作つた軍人としてのテクノクラートとして大村益次郎を描いていたわけですが、もしかすると今の複雑な社会の中では逆の順番なのかもしれないなあと思ひながら、今仕事をしています。

つまり非常に技術的専門的などところから物事が回らなくなって、そこを動かして変えていくことによって社会全体が大きく変らざるをえないという、一種の革命的な動きがあり、それをある段階で、思想的哲学的に整理をしていく人間が出てくるというような流れなのかなあと思っています。

ちょうど金融の仕事をしていただいて、非常に専門的でテクニ

カルな話を、ここ二カ月から大蔵省を排除して進めてきました。自民党の中でもそういった議論をしつかりといっしょにやってくれた勢力が出てきているということ、大きく変わり始めてきていると思っしていますが、とにかく非常に専門的です。引き当て率を何パーセントにしましょうか、低価格にしましょうか、原価法にしましょうかという、いわゆる金融の世界に強い関心を持っている人以外にはどうでもいい話であり、わからない話であります。しかしこのところはどういう立場に立つかということが、実は日本の社会を自立型に変えていくのか、それとも護送船団型でいくのかというところの哲学につながっていく、そういった非常に細かいところが出てきます。

実は細かいところ以外には出てこないんです。金融機関に公的資金を使うのか使わないのかということでは、使わなかったら日本の経済はもたないという点で、実は共産党を除けばみんな一致してしまっている。大きなところのずれではなくて、じゃあどういった条件で入れようかという、非常に専門的なところの違いで哲学の違いが出てくる。実は専門的なところから時代の変化というのは生じてくるのではないかなあということ、この金融の仕事をしていく過程の中で思っています。

それだけにわかりにくい、先が見えない中で多数派を形成していくということの難しさを感じますけれども、幸か不幸か、アメリカなどと対比をした時に、日本の政治は非常に国民有権者の皆さんに対して、自分が何を考えているのか、自分が何をしようとしているのか、という働きかけをするためのテクニクが成熟していません。存在しないに近いと私は思っています。

えなかつた。国民からものすごい中傷非難を受けながら、日本の進路というのをどういうふうにかえたらいいのかと。一九五〇年代における吉田茂さん、そしてまた六〇年安保の時の岸信介さんなど、国民から包囲されたとしても日本の方向性をどういうふうにか決定したらいいのかわからない、こういう緊張感があつたと思います。極端に申しあげればですが。

その後の高度経済成長、そして今日まで、日本の政治家というのは、先ほど橋爪先生が言われるところの職責ということは、よくわからないままにきてしまったんだ、そういうふうには私は認識いたしております。

私自身も前回の選挙は比例代表ですが、次の選挙というのは小選挙区で江東区で戦うわけです。そうした時に選挙にいかにか当選するかということ、そして選挙に通った後に何をやるかという、この問題が出てくるわけです。基本的に多くの政治家の方々とお話している、いかに当選するかということだけがよく論じられるんです。

政治家になって何をやるんですかと言った時に、僕は最終的には総理になって日本の国をどうするのか、その一点だけにあるだろうと思うんです。総理というあまりにもおこがましいですから、それぞれの自分自身の経験を踏まえた上で大臣になって何をやるか。

そういう視点から逆に今の現状を見た時に、皆さん啞然とされると思うんですが、日本の総理というのは、総理を経験した後、何人か出ました竹下総理を始めとして、宮沢総理にしてもですね。普通、総理あるいは大統領を経験して、その仕事を終えた後また一ライン

例えば宣伝カーで選挙の時にガンガン名前を連呼する、どうい地域ではポリュームを上げた方がいい、どうい地域ではポリュームを落とす方がいい、どういトーンでこうい地域はしゃべった方がいい、こうい地域はお涙頂戴型で訴えた方がいい、こういところでは非常に理路整然と理詰めで訴えた方がいいというような戦略というか戦術を、考えながらやっている政治家はほとんどいません。

参議院選挙の時にわが党をはじめ各政党が、ものすごい金額をかけてコマーシャルをやりました。あのコマーシャルを見てこの党に入れようという決断をした人がどれくらいいるか。コマーシャルとしての出来は、それぞれ非常に良かったとは思いますが。しかしそれが投票行動にどう結び付くかということを考えて、あのコマーシャルに大金を使っているのかといえ、私はまったく違っていると思

そうした意味で、政治家あるいは候補者のサイドが、働きかけ、訴えかけについての工夫をすることによって、私は今の日本の政治状況というのは大きく動く余地があるとも思っています。これもまた専門的、テクニカルな部分から物事は動いていくのかなあということに、結果的にはつながるのですけれども。

【司会】 ありがとうございます。東先生お願いします。

【東祥三】 さきほど橋爪先生が言われた政治家の職責というのは、きわめて重要な点なんだろうと思います。

短絡的に申し上げますと、僕は政治家というのは平和な時は何もやらなくていいんだらうと思っっているんです。一九六〇年代の初頭、安保条約の改正に、ある意味で政治家というのはピリピリせざるを

に戻るとい、会社であれば社長さんをやっておいて、今度社長を終わつたから勇退して一会社員に戻るとい、そういう話ですね。そういうことはありえるのか。どこの国を見渡したとしても、こういうことはまず起こっていないわけです。それがなぜ日本において、そういうことが起こっているのか。仕事をしていないということ

僕は九〇年に国会に出る前は日本に住んでいませんでしたから、外から見ていましたが、議員になったから国会に行つてそういう大物議員の活動を見れるのかな、委員会において高い見識に基づくいろいろな質問をするのかな、と思いましたが、全然見られせん。何をやっているかさっぱりわからない。それが影のキングだとか言われる。そういう形で日本の政治が行なわれてきた。そういう視点から考えると、先ほど橋爪先生が言われた、政治家になって何をやるのかということなんだろうと思っんです。

僕の場合は極めて明確でございまして、先ほどお話しした通り、私は一九八〇年代、まさに冷戦構造が崩壊する前、世界中を回っていました。六十一カ国で仕事をしておりました。そこで見られることは何かと言え、日本は平和国家だといふふうには言っている、しかし先ほどどちらと言いました、一國平和主義です。

私は難民救済をやっていました。例えばこれはキリスト教のエルサルバドルの難民でございましたが、その人たちの生命の危険が迫っている、それを私が国連旗のもとに彼らを保護する、私がいなくて目の前で殺されてしまうという、そういう状況下において中南米、あるいは中東、あるいはアフリカで仕事をしてきました。

日本では、国際社会の平和のためにということを多くの識者たち

が言っている。しかし一切そういう顔が見えてこない。日本は世界に対して平和を発信している。しかし言葉だけです。世界に対して具体的な平和を何もなしていない。その現実を見た時に私ははっとしてしまいました。

私は難民高等弁務官事務所で、多くの難民の方と接してきました。難民というのはまさに政治的迫害を受けている人たちですから、日本で報道されているような飢餓に瀕しているとか、かわいそうとかいうことではなくて、政治的に自立をしている人たちです。自分たちの国の政府の考え方に反抗し、そしてそこから逃れて新しい政府を作らなくてはいけない、自国にいれば殺されてしまう、したがって他国に逃げてくる、ですからきわめて凛々しい方々なんです。

私は、ものすごい有意義な充実した日々を送っていました。しかしそういう仕事を続けていれば続けているほど、たくさん難民が出てくるわけです。そうするとこの問題に対して究極的にメスを入れるためにはどうすればいいのか。一つは政治的な問題にならざるをえなくなってくる。じゃあ日本はいつたいこういう問題に対して何を発言しているのか、国際社会の平和に対して貢献しますと書いておきながら、現実に行っていることは何もない。お金をただ出しているだけです。理念、政策がまったくない。

そこで具体的な事実が現われてきた。湾岸戦争というのが起こりました。その時に皆さんご案内のように、一億二千万人の全国民、赤ちゃんからお年寄りまで、約一千万円の拠出をしていただきました。皆さんご記憶にあるかと思いますが、湾岸戦争が終わった後、クウェート政府から二十八カ国に対しての感謝が出された。その二十八カ国の中に日本が入っていたかというところまったく入っていない。

言われた人は何と言ったか。一万円、つまり当時百ドルです。百ドルで命を守ってもらうならば、私たちだってそういうふうになさせていただきたいです。それを言われた時にはもう何も言えなくなりました。まさに言っていることとやっていることはまったく違うわけです。

よく私も世界各国の人々とお話しします。日本は素晴らしい、素晴らしいという方々は沢山います。しかしその時私はユーモアをこめながらブラックユーモアに近いんですが、皆さん方日本は素晴らしいとおっしゃいますけれども、本当に自国を日本のようにしたいと思いませんか、そのように外国の方に聞きます。皆さんニコニコと笑って、ミスター・アズマ、そうはしたくないねと。日本人は素晴らしいと皆さん方おっしゃいます、本当に日本人のようになりたいと思いませんか。いやいや、とみんな言います。これが世界における日本の現実なわけです。

私は江東区という小選挙区におります。はじめにこういう話をしていると、東さん江東区だから、下町だからあまりそういう話をしてもわからないよ、こういうふうにおっしゃる。外交のことを話しても、選挙の足しにも何もならないよと。本当なんだろうかと。

私は数ヶ月、そういう形ですつと話します。ある時おばあちゃんが世界地図を買ってきて、東さん、いろいろな世界の国々の話をしてくれる、あの国というのはここにがあるんだねと。そういうことよって、日本というのは変わっていくだろうというふうには、僕は確信しているわけです。

日本の外交、そしてまた安全保障政策、何一つないんですよ、日本は二十四万の軍隊組織を持つておきながら、これをいざという時

パナルティスカツション



その後、掃海艇を派遣しました。その掃海艇の艦長のお話を間接的にお聞きしました。多くの国々から、日本というのは世界平和だといつも言っているけれども、現実には戦争が終わった後に来てくれた。来てくれないよりまだましだと。その艦長さんはそれを言われた時に、愕然としてしまった。一言いえたのは、皆さんそれでも私たちは国民一人に一万円の税金をいただきながら、そしてそれを集大成して皆さん方に拠出させていただきました。

にどのように動かしただらいいかということが一切、日本の法律には書かれていないんです。

先日、北朝鮮からいわゆる弾道ミサイルというものが飛んできて、日本の上空を越えて太平洋側に落ちた。その時に防衛庁長官は何をやっていたのか。家に帰って寝ているわけですよ。日本の危機的な状況が起こっている。それに対してどうしたらいいかというマニュアルさえできていない国が、この日本です。事無きを得てよかったわけですけども、例えばアメリカは九月三日の時点で、すでに爆撃機六機をグアム島に派遣して、訓練という名の下に訓練という名の下での北朝鮮に対する威嚇ですね、それをちゃんと行なっています。

日本は何の準備もしていない。国家安全保障会議というものがありながら、総理を中心に議論しなければならぬ、そういう場面がこれ以外どこにあるのかと思えるにもかかわらず、何ら議論していない。そういう国に残念ながらわれわれがいるということ、どれだけ多くの皆さん方と認識することができているのか。そしてそういう問題に対して、どれだけ日本の政治というものを動かしていくことができるのか。これが僕は今後の最大のポイントなんだろうと思っ

ています。それぞれ皆さん方、多くの政治家がいますから、それぞれの関心に基づいてそれはそれでやればいいんです。しかし先ほど申し上げました通り、平和な時代というのは政治家はあまり必要ないんですよ。一九七〇年代、八〇年代、経済界の多くの方々が言われていたじゃないですか。日本の政治は三流だけれども経済は一流だ。うまくいっているからです。しかしそんなことはありえない。日本の政

治が三流なら、経済も三流になってくるということを常に申し上げていたわけです。その通りになっているではありませんか。

そういう意味では、今やらなければならないことは個人的にはそういうことです。そしてなぜ安全保障問題をやるかといえば、究極の福祉ですから。基本的な人権を究極に守るのは、外交と安全保障しかないわけです。したがってこれをちゃんとした形でもって、日本の中に打ち立てることができれば、それでもって僕の仕事は終わる、このように思っているわけです。

しかしそういう仕事をさせていただくにしろ、八年間かかってもなかなか動かないわけです。やっと動きつつある。しかしなかなか動かない。重たい。それがまさに日本の政治状況なんだろう、そのように思います。

【司会】 第一部の講演も含めまして、戦後日本の盲点とも言うべきものが、今いろいろな形でふきだしているということ。それを解決の方向に引っ張っていく政治のリーダーシップというのはまったく未確立で、政党政治の基礎から作っていかなくてははいけない。その非常に複雑な過渡期中で、ある種泥沼に足をとられながら、ある一定の方向を目指して進んでいかなければいけない、というような状況だろうと思います。

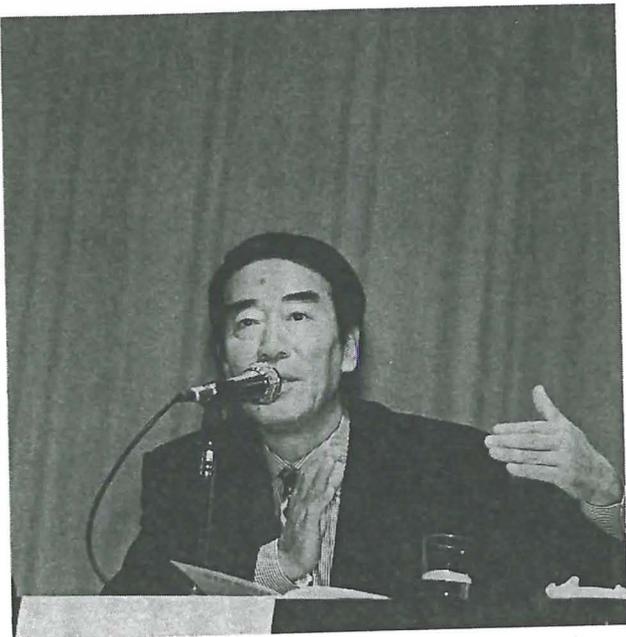
先ほど中村敦夫さんが到着されました。先の参議院選挙の東京選挙区で自民党候補を蹴散らして、劇的な当選をされたわけですが、公約である新しい政党、国民会議の展望などをお話いただきたいと思えます。

【中村敦夫】 遅れてきてすみません。中村敦夫でございます。参院選挙での私の公約はたった一行、新党を作るということだっ

くということが一番重要なことなんです。これを専門的にやる職業というのはいないわけですから。

われわれの世界がどうなるのか、あるいはこの国がどうなっていくのか、ということを見通していくということが最大の任務だと。そして見通して国民よりも先回りして、国民の安全と幸福を確保するような、そうしたシナリオを作っていくということが一番重要な点です。

ですから少なくとも百年先、そういう長期的視点、そこまでの想像力を持っていかなくてははいけない。そして同時に二、三十年先の中期の視点も必要だ。そして現在直面している問題との接点、ここ



たわけです。もう新党ブームが去ってうんざりしている時にそれを言わなければならなかったということは、大変つらいものがありました。しかし私は、日本の政党政治というものをずっと見てきまして、全然機能していない、いわゆる普遍的な良識というものが通らない国会が続いてきていると感じておりました。

これはなぜかな、原因はなんだろうと考えましたら、やはり政党というものがバックの団体によって成り立っているという、日本の政党の独特の在り方に問題があるんだと。

それはなぜかといいますと、結局は選挙だ、選挙で勝ち上がらなければ話にならないということが政治家の一番の問題になってしまっている。頭の中の八割くらいは、いつも選挙のことを考えている。選挙を有利に戦うために、当然団体や組織に頼っていかざるをえない。

ここが一番大きな問題なんだと考えました。ですから私が新しい党を作ると言った時には、団体のダミーではない、一般の人々の良識を代表していくような普通の人々の政党を作るんだということの意味していたわけです。

これはなかなか大変なことだと思います。しかし政治の役割というのなんだろう、それは政治家の役割でもありませんけれども、やはり誰よりも鋭く未来を洞察することだと思えます。北京原人とかジャワ原人がわれわれの先祖としますと、われわれは六十万年目の人類で、一番新しい人類なわけですから、われわれが遭遇することがらには未知の体験ばかりなんです。過去の問題がこれから起こるわけではありませんから、われわれは初めての状況と遭遇するということになるわけです。政治家というのはその先を見通している

の視点も必要だ。少なくとも長期的視点、中期的視点、そして現況と、三つの視点というものはなければいけない。もしなければ本来に対して政党として、あるいは政治家としてグランドデザインが持てない。

これを持っていないのが日本の既成政党なんです。あらゆる政党は、短期的視点といいますが、あつ、あさつての政局というところでもみあつてしまふんです。もみあつてどこに行くのかということも見えない。ですから結局はグッチョロールしていくんです。国民はどこに連れていくのかということが、すっぱりぬけてしまうわけです。ですからその党のエゴといいますが、そのバックにひかえている団体のエゴというものの目先の戦いになってしまふ。まさに国会というの、団体の談合の場所になっていく。

そうしますと、一般の多くの人々は例え団体に属していようと、実は個人、普通の人々なわけです。その人々が常識だと思つような、当たり前のことがなかなかまかつすぐに進まないということのくりがえしが続いてきているわけです。

そして政治の重要な問題、あるいは政策というものは誰が作っていくかといえば、それをとりまいている官僚たちということなんです。政治家はもう政局のゲームで忙しすぎて、長期的な計画とか中期的な計画を持ちえない。それだけの余裕がない、ブレーンもいらないということ、要するに権力闘争だけに入っていくわけですから、専門的にそういうことを研究している官僚機構というものが結局はセットしてしまう。その中につきぱり政治家がはまり込んでしまうというのが日本の国の形だと私は思っています。

このスタイルというものは、歴史的な問題でもあつて考えていま

す。われわれが今持っている体制というものは、私は明治維新から始まったと考えています。徳川時代というのは鎖国でもって、幕藩体制として地方分権、ほぼ地方主権という形で各藩が独自性をもって自分たちの地域を経営していた。幕府の統制というのは、実は非常に小さかったわけです。統治機構としてはかなりバランスよく働いたわけで、二百七十年近い、世界史の中でも不思議に長い統治形態というものを守ってきたわけです。

しかし世界の流れの中で欧米の植民地主義というものがおしよせてきて、ここで恐怖が日本列島を駆けめぐるわけです。そうした分権社会、ばらばらな統治機構では欧米の植民地主義に対抗できないということでも明治維新が起こって、いきなり国家主義という、中央集権型の国家へ収斂していったわけです。

そして日本人のすばらしさというんですか、一つの極に集中するものすごい力を発揮するという能力がありますから、またたく間に近代国家へのしあがっていった。

明治維新をなしたとげた人々は、各藩で育てられた非常に優秀な志士たちといえますか、下級武士たち、そういう人たちで、これが本当の政治家だったんでしょうと思いますが、しかし急速な国家主義という体制を整えるためにはどうしても中央集権、そして優秀な官僚が集結していくという、そういう装置が必要だったわけです。ここから官僚機構というものが国家主義を掲げて日本の統治形態として主流になっていくわけです。

結局のところそれ以来、あまり政治が力を持たないという歴史が始まります。なかなか政治家が主導権を持つということがなくなっていく。どうしても官僚機構の方が強くなってしまふ。

遂げるわけで、これは歴史的な条件に恵まれたということもありますけれども、結局のところ最終的には暴走してバブルへ突入していく。そして敗北する。

しかし敗北したことを正直に認めないし、発表しない。不良債権がいくらあるのか、そんなことですら、当然発表すべきものを隠し続けている。その間にどんどんどんどん被害が増幅していつている、それが現状なんです。ですから今起こっている事柄と（第二次大戦末期とは）同じなんです。

外国の金融専門筋はもう日本の銀行を、大手十九行、全部債務超過だというふうに判定しているんです。この国は破産しているわけです。そのことを発表しようとしれない、認めようとしれない、何もわからずならだららとごまかしていこうというのが現実なんです。これも政治というものが不在なんです。断を下す政治家もいない。そして未来に対してグラントデザインを示す政党もない、というような状況です。

これが私は日本の形だと思えます。ですから明治以来、政治というものは本当の意味でこの国に存在したのかどうか。政治家というものが本当に主導権をとれたんだろうか。実は官僚機構という又エのような権力の中で動いていただけにすぎないだろうと。しかしこれは両方失敗したわけです。明治維新で掲げた二つの路線が、官僚主導で失敗した今、確実に国民が主導権を握っていかなければいけないんです。そのためのシステムというものを作っていかなくてはいけないというのが、私は現状だと思っています。

私は、明治維新に代わる大きな政治的季節がもう一度やってきたと思います。これからいろいろなことが起こるんじゃないかと思

明治で掲げた二つの目標、殖産興業それから富国強兵と、この二大路線がありますけれども、植民地主義というものが強い時代にあつては、やはり軍官僚というものが突出し、最終的には陸軍参謀本部あたりの佐官クラスの軍官僚が暴走し始める。満州事変から始まり、第二次世界大戦に突っ込んでいくわけです。

ですからそこはよく見ますと、政治家が主導した戦争ではないんです。いつのまにか誰が責任者であるかわからないような軍官僚の暴走、そして官僚機構という又エのような、責任者がわからない、そうした一団の力というものが日本中を巻き込んでしまふわけです。そして結局のところ大失敗をするわけです。

しかし戦争が敗戦だとわかって責任を取る人間がいなから、国民には転進という言葉を使って、日本が勝っている、勝っていると大嘘をつきまくるわけです。今と同じなんです。国民は知らないから、万歳万歳と言っている間に、どんどん被害が大きくなっていったというわけです。

戦争を終わらせたのは日本の政治でもなければ、軍官僚でもなかったんです。アメリカが原爆を落としたという、他力的な形でしか戦争を終結できなかった。ですからあの戦争に対する責任者というのが、今でもはっきりしない。誰が責任者だかわからないまま、謝罪を繰り返してみたり、また覆してみたり、ということが繰り返されている。政治の責任というものがなかったんですからはっきりしない。

戦後は軍拡路線がだめになって、今度は殖産興業路線が強くなります。大蔵省を筆頭とする経済官僚たちが、今度は大きな権力を持つて進んでいくわけです。そしてまた再び非常に大きな経済成長を

ます。私は今は、官僚主導の終焉という意味で「明治の終わり」だというような時代認識を持っています。

今まで考えてきた事柄をわかりやすく、グラントデザインを含めて発表して、それが新党の最初の旗揚げになるだろうということ、やっとなさその冊子の印刷があがったばかりなんです。ずっとこれをやってきました。

今月末に、私はまず一人で旗を揚げたいと思います。いろいろな難しい問題がありますけれど、今日まっさきに印刷があがったばかりのこの冊子を、廊下の外で初めて皆さんの前に積みました。これは五百円頂くことになっていますけれども、これを読めば全部わかります。難しい問題は何もありません。未来はこういうふうにかければいけないということがはっきりします。五百円でわかれば安いものです。

総選挙—改革派の総結集構造への

道のりと、

有権者に問われる覚悟

【司会】 ありがとうございます。

それでは最後に一つ、これはどなたでも結構なんです。今日の議論の中でも、現在大きな歴史的な転換にきている、ただこの次の方向を決する政治のリーダーシップというのはまだ見えないう。つまり政党政治の文明が日本にはございませんので、これは非常に難しいことになっていることなんです。しかしなおかつ次の

総選挙、いつあるかわかりませんが、遅くとも来年中のどこかにはあるはずですが、次の総選挙というのは、目指すべき改革の方向へ一歩踏み出しうるような新しい政権構想、あるいは政治プロック、つまり改革派を総結集するようなものが見えるのか見えないのか、これによって自民党政治との攻防というのは相当変わってくるはずだと思っんです。

この次の政権が、すぐに本格的な改革の政権になるのかどうかということとはまた別の問題で、あくまで過渡的なものにしかならないと思っんですが、ただそのことを示せるかどうかによって、今度の参院選挙に示されたような、変えなければならぬという民意がもう一歩育成できるのか、それともまた拡散をしてしまうのかということにもかかわってくるかと思っんです。

先ほどの橋爪先生の話とつなげますと、自民党との差別化によって選挙を戦うところから、次の改革に向けた政権構想の可能性みたいなものを提示しうるかどうか、そこでもう一度有権者との意志の交流ができるかどうかということが、次の選挙の焦点点というふうにも私ども考えているんですが、この点について何かご意見あるいはこうしよう、したい、するべきだと思っようなことがありましたら、どなたでも結構ですので、お話しいただきたいと思っんです。

これはちょっと微妙な問題にもなるかとも思っます。当然ご自分の党を第一党にということはもちろんだと思っんですが、参議院はちょっと性格が違ってるかと思っますので、衆議院の四人の先生の中でどなたでも結構です。いかがでしょうか。

【東祥三】 私が数年来一貫して申し上げてきているのは、日本

グランドデザインを書いている政党がないというお話でしたが、僕らはもうすでに書いてあるわけです（「日本再興へのシナリオ」）。こういうものを全ての政党が出し、そして皆様方が読んで政党を選んでいくというふうになれば、新しい時代が始まっっていくということなんじゃないのか、と思っんです。

選挙に当選して何をやるのかが問題なんです。私も政治家になっった時に、東さん、バッチを外してしまえばただの人だよ、ただの人以下だよと言われたことがあります。確かにそうなんです。だからとってただ単に選挙戦術をいくら語っただとしてもこれは面白くない、意味がない。そうではなくて本心に志をもっ、そして日本の社会をこう変えていくという人たちが、皆さん方にとだけ応援していただけるか、そういう問題です。

そのメルクマールは何かと言え、今でも過半数の方々は何とかなるだろうと思っっているわけです。僕は絶対に、何とかならないと申し上げているわけです、二年前から一貫して。正月の区の賀詞交換会でしゃべっているわけですが、毎年毎年厳しくなっっている。今年よりも来年、このままだったらもっとなんか難しくなっっていく。

ある自民党の執行部の方とお話した時に、東さんの言っっていることは間違いない、しかし難しいんだよねというんです。これは日本語のあやなんですね。難しいんだよね、という意味はやらないという意味ですから。

そうすると今のまま、今の状況に満足している、あるいは何とかなるだろうと思っる人は自民党、そうでない人たちは別の党ということですよ。そしてその政党や政治家が何を考えているのか、本当に政策遂行能力があるのか、政策提言能力があるのかということ、

では改革改革という言葉だけが叫ばれていますが、今日の皆さん方の御指摘を通してわかる通り、改革というのは現状の仕組を変えなくてはいけないわけです。経済の仕組、さらにまた政治の仕組、さらにまた社会のあり方そのものを変えるということですよ。変えるというとなんかいいんですが、破壊するということですよ。そこから新しい仕組をどのように作りだすのか。

たとえば公共事業の問題を取り上げたとしても、昔は渡辺美智雄先生がものすごいわかりやすい表現をしていたんですが、国家主導体制あるいは談合体制でも何でもよろしいですが、日本全体が貧しい時にこれを繁栄させる必要がある。ではどこに優先順位をつけるべきなのか。それは大企業中心でもつていこうと。大企業を親と称するならば、今度は子、子会社をそれにのっけていく。そしてまた孫を乗せる。だから一番元にある親がこけちゃえばみんなこけちゃうだろうと。

こういう形ですとシステムが続いてきたんです。私たちが申し上げているのは、こういう官僚主導ということではなくて、安全保障の問題を除けば、経済活動というのは全部民主導でやれということですよ。今の中村先生のお話していえば、幕末から明治というのは廃藩置県、私たちが申し上げているのは廃藩置藩にせよと、逆に戻せと言っっているわけです。中央省庁が鹿児島や沖縄の街づくりにまで関与する必要はない。全部その地域の人たちに任せなさい、お金も全部渡します、ということをやっているわけです。

そういう意味からしますと、まさに今までのありようそのものがいいと思っるならば、どうぞ自民党に投票してください。そうでなければ私たちなんではないんですか。

皆様方に調べていただく。日本は武力闘争はできませんから、唯一の力というのは皆さん方の一票一票なんだから、それによって必ず変えられる、その認識を持つか持たないか、というのが最大のポイントなんだろうと思っます。

【司会】 ありがとうございます。他にどなたかいらっしやいますか。

【枝野幸男】 次の選挙で大きく変えられるかどうか、ということについてはわたしは必ずしも確信はもっていません。これは正直にいうべきだと思っます。

今私は、菅さん鳩山さんを中心とする政権を作ろうと思っっていて、今の民主党の主流派を中心とした政権を作ることができれば国民の期待に応え、時代の期待に応える政権を作れるという自信は持っっています。それを決めるのは有権者の皆さんだと思っっています。

そして今の日本の状況を客観的に考えた時に、これはわれわれ政治の側、そして社会や世論の側、双方の問題としてですが、まずわれわれの側はわれわれが何を考えていて、こういう実行力があるのだということについての十分な説明ができていくかと言っると、その自信は今の段階ではもっていません。まだまだその部分の努力が足りないと思っています。

そして日本社会全体に、本当にこのままではだめなんだという危機感があるのかということ考えたときに、東先生のおっしゃられた通り、改革というものは古いものを壊すということですから、壊すことによってマイナス、損をする人も必ず出てくるわけで、それを乗り越えてでも、つまり血を流してでも手術をするんだということまで危機感が強くあるかといえば、それは私たちの皆さんに対

する説得が不十分であるということも含めてまだまだ、そこまで血を流して、痛みをこらえてでも手術をしようというところに、日本社会全体の空気がなっているとは私は必ずしも思っていません。

しかしそれは東先生のお話の通り、非常に事態は急速に危機的な状況、がけつぷちまで追い込まれているというふうに思っています。われわれに、というのは政治の側だけではなくて、日本人に残されている時間というのはそんなに多くはないだろうと。堺屋太一先生は、明治維新も明治維新から十年、それから戦後の改革も一九四五年から五五年体制まで十年、大きな歴史的な転換は十年かかる、だから平成元年くらいから世界は変わったけれども、日本は平成五年の日本新党ブームの選挙からだからもう五年くらいかかるんじゃないかと、大臣になる前に言っていました。私は五年は待つてくれないだろうと思います。

それを決めるのは多分マーケット、市場経済、つまり社会の環境が日本人に対しても、そして政治家に対しても、それを余儀なくされるまで、もしかすると次の総選挙の前にも追い込んでいくのではないかなあと思っています。

少なくともその時に、それに応えるだけの準備はできているという自信は私自身は、あるいは私たちはもっているというのが、現状で申し上げられることだと思っています。

【田中甲】 一言だけ。どのような枠組みになるかということはまだ見えませんが、有権者の皆さん方は自民党政権に変わる政権を作ってもらいたいという思いを持っていることはまちがいないことだろうと思っています。

小選挙区の中で、前回の選挙は自民党候補者との差別化をどうは

ことを、まずはやはりはつきりさせておく必要があると思います。

その意味はさつき前門の虎の話が出ましたが、二十一世紀に向かつて、荒れ狂う市場の論理というものが地球の砂漠化、人間の心の砂漠化というものをもたらすということははつきりしてきているわけでありますから、それに対してわれわれがどのような知恵を絞り、工夫した社会システムを作っていくか、そういうことを迫られているわけですが、実は日本の政党政治はそのような壮大な新しい政策システムを作っていくどころか、もっと当面のいろいろな諸問題に四苦八苦しているという意味で、これまで五十年間か何十年間かわかりませんが、日本の政治はさぼってきたということです。

政治がさぼってきた。さぼって官僚に仕事をやらせてきた、経済は企業にといいことで全部お任せ。自分は配るだけ。自民党のみならず全ての政党が、そのつかけを払わなければならないという、そういう意味でピンチだということを私は申し上げます。

じゃあ次の衆議院総選挙が、そういう観点からいきますとどういう意味を持つてくるかという、これもまた大変厳しい重荷を背負わされた選挙になります。

つまり政権交代をめぐる選挙になります、またしていかなければならぬ。と同時に、実はそうならざるをえないという面があるわけです。つまり数十年にわたって日本の政党政治はさぼってきた、そのつかけが自民党の自壊、自己崩壊というかっこうをとって今如実に表れているわけです。政策に強いはずの自民党、不況に強い自民党、経済に強い自民党、福祉に強い自民党、そういうふうに通ってきた自民党が、このていたらくで何もできない。政策に対する研鑽

かるかということだったんですけれども、次の選挙は政権交代のリアリティがあるのかどうか、そのことを有権者の皆さんに示すことができるかどうかの選挙になると思います。

つまり自民党、共産党と、もう一つのポジションをきちっと選挙協力をしながらおさえていくことができるかどうか。前回の新進党と民主党のようにお互いの足を引っ張り合うようなことではなくて、それを学習として、新しいポジションを選挙協力という形でおさえていくことができるかどうか。

私は現在の民主党にはいろいろな問題があるとは思っていますけれども、そこに投票すれば首班指名の際に、菅直人と書くという明確なお互いの選挙協力の体制ができた上で選挙を戦った際には、あまり申し上げてはいけません。かなり肯定的といえますが、楽観視はしていませんが、時代は必ずといっていいほど変わってくと見えています。

これが司会のご質問に対する答えなんです。私はもう一点考えています。この総選挙を機会に、地方の政治を変えていくしかけを同時に組まなければいけないと思っています。千葉県の場合は十二の選挙区がありますが、その半数以上で自民党ではない候補者を当選させるという結果を出して、地方議会の会派を変えていく、会派の色合を変えていくとか、あるいは知事選挙や首長選挙の流れを変えていく。こういうものもきちっとくんでいくチャンスでありますから、そのことも考えながら対応していきたいと思っております。

【錦織淳】 私が申し上げたかったことは、舌足らずだったかもしれませんが、日本の政党政治が皆さんが考えられて、あるいは思っておられるよりもっと深刻なピンチに立っているという



に励み、天下国家を論ずることを放棄してきたことのつかけを、今の自民党政党のていたらくというものによって正面から問題にされていく。

私は小渕内閣は自民党のラストエンペラーになるかもしれない、またしていかなければいけない、こういうふうには思っています。しかしそうしなくても自動的に崩壊してしまうこともあるということ。そうするとこれは破綻銀行の例じゃないけれども、ブリッジバンクなり、あるいは受け皿バンクを作っていかなければいけない

のと同じように、新しい受け皿政権を作らざるをえないんです。もうちょっと待ってくれ、もう少し自民党で頑張ってやってくれ、その間に五年間腕を磨くからというふうな話ではないということなんです。もう目の前で行き倒れになるかもしれない、そうなる代わって誰かが政権を背負わなければいけないという、非常に難しい場面に今立っているという意味で、次の選挙は政権をかけた戦いにさらざるをえないと、私ははっきり断言をしたいと思います。

問題はその政権が非常に厳しい課題を背負わされて、二十一世紀に向って展望を開かなければならない。そういう意味では総論的な方向付けも与えなければならぬけれども、もっと手前の具体的な問題をどう一つひとつつきりぬけていくか、ただきりぬけるだけではなくて、できることなら具体的な問題の解決を通じて、二十一世紀に向かっただけの展望を切り開くような解決の仕方を提示したい。これが理想です。しかしそんなことができるかどうか分からない。だけれどもやらなければいけない。

硬化化した日本の政策決定の仕組、これはもう社会全般にわたってそのようになっていきます。行政もそうですし、実は官僚の責任にしているけれども、国民全体がそのような官僚による政策決定の仕組に組み込まれているわけでありまして。喜んでかいいいやながらかは別として。そういう中で新しい時代にふさわしい、新しい政策決定の仕組を作っていくかなければいけない。そのためにはこれまでの硬化化した仕組を壊していく、それにとっかわるものを作っていくということが大事でありまして、この政策決定の仕組を作りながら、新しい政権がその政策を展開していくという、そういう意味での政権になれるかどうかということだと思います。

ここで食うか食われるかの戦いが起こると思います。自民党というのは改革をやりたくて連立を組むのではなくて、当面政権を維持したいから組むんです。だから社民党の二の舞をしてはいけない。これだけの長期的な性根が、民主党か、あるいはどことペアを組むかわかりませんが、その改革派政党にあるかどうか。逆に自民党を壊していくような戦略、戦術をもって次の政権、次の国会を乗り切るかどうか。むしろ次の次の選挙が一番大事だというふうに私は思います。

【司会】 ありがとうございます。

今の政治が抱えている根本的な問題、つまり政党政治の文明がないという日本の状況、それは国民にも責任の一端があるということなんです。これを打破していく見通しというものを、一定程度論議できたのではないかと思います。本日おいでいただいたような政治家の方々と、そして私たち有権者―自らの責任で決するということ、賢い有権者に私たちはならなければならぬわけですから、その力、橋爪先生は次の次の選挙とおっしゃいましたが、それにもらんでこれ以降の政治過程の中で、日本の政治をホンモノにしていこうという一歩を進めていきたいと思えます。

これで第二部のパネルディスカッションを終わらせていただきます。本日は長い間ありがとうございます。パネルの先生方に、もう一度拍手をお願いします。

(拍手)



その政権の中核というものはもちろん政党が担っていかねければならないけれども、しかし今の政党だけで充分だろうかというふうな考えますと、一つの党でもだめでしようし、かなり幅広くいろいろな英知を結集していかねばならない。もつと言えば民間、その他社会全体から、英知を結集していくような、そういう政権を作っていくかどうか、それは本当の意味で非常に苦しい戦いだと思えますが、私はそれが次の選挙の大きな課題だと思えます。

【司会】 ありがとうございます。それでは最後に橋爪先生に、総括的にお願いします。

【橋爪大三郎】 次の選挙のことですが、私はあまり楽観していません。次の選挙は自民党は案外しぶいと思います。参議院と衆議院は違うわけです。そして改革派の総結集というけれども、実態は改革派のどんぐりの背比べですよ。ですから選挙になれば、今壇上に並んでいる方も、改革とおっしゃっているけれども、お互いに戦わざるをえないわけであって、自民党の方が力がある。

そこで選挙の結果がどうなるかというと、一番ありそうなのが、共産党がある程度をとって、自民党は過半数にとどかないかもしれない。このケースで話をしましょう。後は改革派の総並びでしょう。そうしたときに、自民党はそのままでは政権をとれない。どうしようか。考えることは民主党と手をくんで菅直人さんを首相にして、ペアでやりませんか。村山政権と同じことが起こるわけです。こ